

## ある新生児科医の話

横浜市立大学附属市民総合医療センター

総合周産期母子医療センター 新生児科

**佐藤美保**

リレーコラム 12

キャリアの積み方-私の場合

長男を授かったのは研修医 2 年めの頃でした。翌年から小児病院 NICU でレジデントとして働くことが決まっており、苦しまぎれに医長の先生にご相談したところ、「それでもやる気のある人に来てほしい」という有難いお言葉をいただき、「何はともあれ、がんばってみよう！」と決心しました。ついこの前のことのように、思えば、このときから周囲の方々に助けていただいていたばかりの 18 年間でした。

レジデント時代は近所に住む私の母に長男を育ててもらいながら、何とか 2 年間勤めきることができました。そして気づけば 5 人の子の母になっていましたが (!! )、その間は丸々 1 年育児休暇をとったり、夫のアメリカ留学同伴中だったり、大学で研究をしたり、半分医者 / 半分母親という何とも中途半端な状態でした。しかし、いろいろな形をとりながらも「いつかは NICU で働きたい」という気持ちは常に心の片隅にありました。折しも NICU の部長から「子育て中女性医師の勤務体制を模索中、ゆるい勤務で働きませんか？」とお声かけいただき、五男が生後 6 カ月の時に 6 年半ぶりに NICU に復帰しました。勤務は 9-17 時で夜間呼び出しなし。当直は月 2 回。こどもの病気や学校行事等の際は休んで可。ただし、ゆるい勤務の裏返しで責任の重い仕事はできず、患者さんの受け持ちはありません。でも、なるべく積極的に病棟での診療に関わり、外来は通常通り担当しています。不在医師の代行や新生児蘇生法講習の開催など自分にできることをみつけて少しでも職場の役に立てるよう努めています。一方、帰宅すれば夕食の準備、片付け、朝はお弁当作りと忙しく、土日サッカーの試合当番やこどもの行事等で休めません。それでもがんばれるのは仕事の充実感があるからだと思います。赤ちゃんが治療に反応して元気になってくれたり、自分自身がスキルアップできたり、若い先生や学生さんに教えることができたり・・・そんな時に感じる充実感が私のモチベーションとなっているのだと思います。

とは言え、自分の気持ちだけでは仕事と子育ての両立はできません。私の場合、母の強力なバックアップがあるからこそ両立が可能になっています。夫も若いころは忙しく協力は得られませんでした。今は多忙な中でも保育園の送りを手伝ってくれますし、私が当直の日はこどもの面倒をみてくれます。よく、「がんばってるね」と言われますが、私はやりたいことをやってきただけというのが本当のところ、母や夫、職場上司・同僚の理解、協力がなければ今の私はありません。

最後に・・・今は、私が長男を産んだ 17 年前とは違って女性医師が子育てしながら働くことも珍しくなくなりました。歩みはのろくても、やれることを確実にやっていけば道は開けます。みんなで助けあっていきましょう！

★著者略歴★ さとう みほ  
**佐藤美保**

横浜市立大学附属市民総合医療センター 総合周産期母子医療センター 新生児科

平成6年 横浜市立大学医学部卒業

脳神経外科医の夫と保育園児～高校2年生までの

なぜか男の子ばかり5人との7人暮らし

最近になって読書に目覚め、時間をみつけていろいろな本を読んでいます。

### 男女共同参画推進委員会より

「必要な条件は、「支援」」

臨床研修終了者（男性 3694、女性 1872 名）を対象に、厚生労働省がアンケート調査を実施（平成 25 年）しています。「子育てをしながら勤務を続ける上で必要な条件」の回答として多かった順に、総数（5,566 名）では「職場の理解・雰囲気」「短時間勤務制度」「当直や時間外勤務の免除」「勤務先に託児施設がある」「配偶者や家族の支援」でした。興味深いのは、女性は「配偶者や家族の支援」と「短時間勤務制度」の割合がほぼ同じなのに対し、男性における「配偶者や家族の支援」は、「短時間勤務制度」の約 3 分の 1 であることです。男女ともに働きやすい職場を希望する気持ちは同じですが、必要とする条件はそれぞれ異なることを実感します。

男女共同参画委員会では、第 120 回日本小児科学会学術集会で、それぞれの必要な条件、支援について、日頃想っていることを話しあえるカフェを企画しました。また、好評を得ている“先輩に学ぶキャリアの積み方・活かし方”のシンポジウムの part3 も開催します。ご期待下さい。